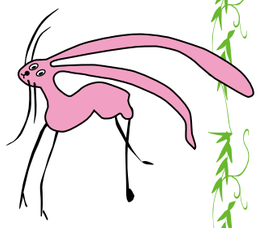
京都市内の埋蔵文化財　発掘調査速報　No.42（R６－３）

平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡



調査期間：令和６年７日２２（月）～８月31日（土）

調査機関：京都市　文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課

1　発掘調査について（図１～３）

調査地は旧丸太町通と七本松通の交差点から、東へ50mほどの場所に位置しており、「平安宮豊楽院跡」及び「鳳瑞遺跡」に該当します（図１）。

豊楽院は天皇の宴遊や外国からの使節をもてなす国家的な饗宴、そして元日や大嘗祭の節会などが行われた場所で、まさに平安時代における国家権力を象徴する施設です。豊楽院は四方を築地塀で囲まれ、その中には主殿である豊楽殿を中心に複数の建物が配置されていました（図２）。

調査地の東側隣接地では、昭和63（1988）年に発掘調査が実施され、地表面から40cmほどの深さで豊楽殿の基壇や壺堀地業などを良好な形で確認しました。これは豊楽殿の実態を明らかにした調査として、非常に大きな成果となりました。その重要性から平成２（1990）年には国の史跡となっており、現在も地中に遺跡が保存されています（図１）。

調査地は、豊楽殿跡のすぐ西側にあたります。敷地の南半部には豊楽殿から東へと延びる回廊が想定される地点で、豊楽院を復元するうえで重要な場所です（図２・３）。この場所で個人住宅の建て替えが計画されたことから、土地所有者の御協力のもと、今回、発掘調査を実施することになりました。

2　調査成果（写真４・５）

敷地の南半部に調査区を１箇所設けました。上から順番に掘り下げていくと、近現代に厚さ約1.1mもの盛土を行い敷地を嵩上げしていることが分かりました。その盛土の下、地表面からおよそ-2.1 mで近代の耕作土、-2.3 mで近世の遺物を含む大きな土坑が見つかりました。この土坑の下、およそ-2.6mで地山の明黄褐色シルトを確認しています。

この土坑は底が凸凹しており、かつ地山のシルトに小石が増えてくる深度で掘削をやめていることから、いわゆる「聚楽土」を採取するための土取り穴と考えられます。この土坑からは、近世の陶磁器の他に、平安時代の瓦片（鴟尾・緑釉瓦含む）や凝灰岩の破片が出土しています（図４・５）。昭和63年の調査でも同様の平安時代の遺物が見つかっていることから、今回の出土遺物も豊楽院で使用されていたものと推測されます。

周辺の調査成果を踏まえると、本調査地では近世の土坑などによって平安時代の遺構がすでに削平された可能性が高いことが分かりました。しかし、出土遺物は本調査地にもかつて豊楽院に関する遺構が存在したことを示唆しています。実態解明のため、今後も周辺での継続的な調査が望まれます。　（熊井　亮介）

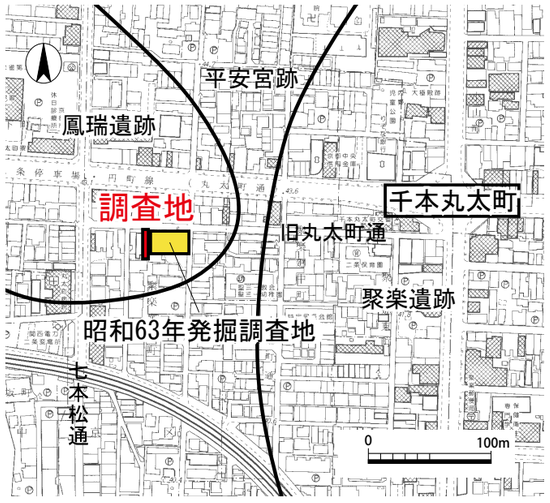


図１　調査位置図

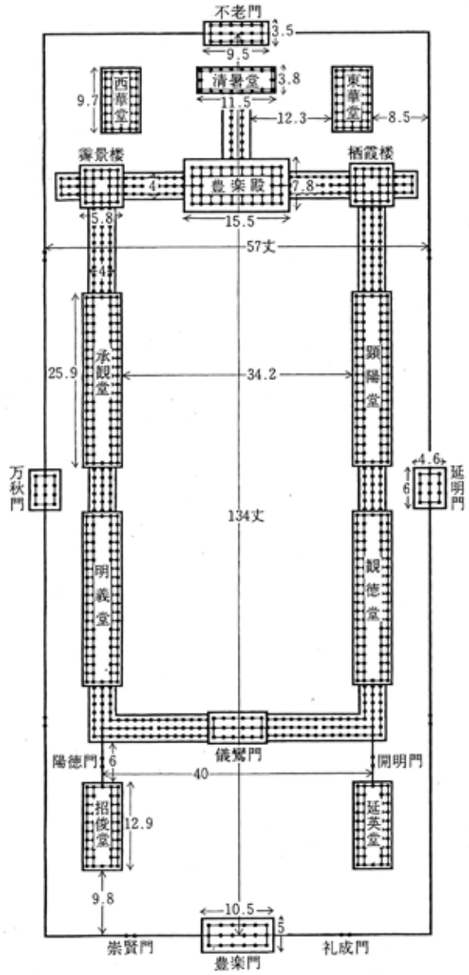


図２　豊楽院復元図

※古代学協会ほか編『平安京提要』1994より転載、一部加筆

図４　出土遺物（緑釉瓦）

図５　出土遺物（凝灰岩片）

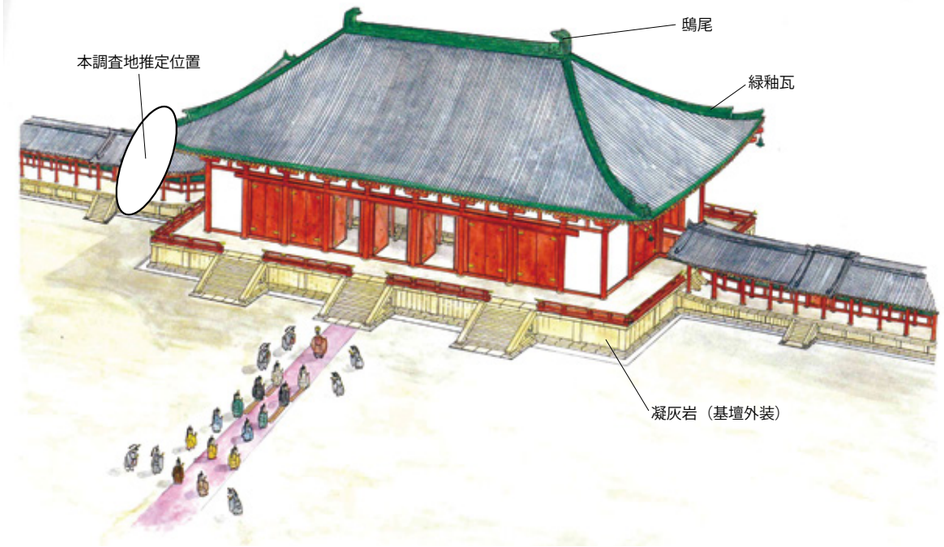


図３　豊楽殿復元イメージ画

※梶川敏夫『よみがえる古代京都の風景』2016より転載、一部加筆